

論文の和文要旨

論文題目

異質な他者とのコミュニケーションにおいて生じる
情動的困難さに対処するためのアドラー勇気理論
——グローバル化社会における英語教育に着目して——

氏名

加藤 慧

今日のグローバル化社会では、異なる価値観や文化的背景を有する「異質な他者」(Tajima, 2021) に対して、英語による円滑な交流を行うことのできる人材の育成が喫緊の課題であるとされている(文部科学省, 2011)。しかし日本の大学生はこの種の交流場面において、コミュニケーションを行うための十分な外国語知識を備えているにも関わらず、実際の交流場面になると緊張や不安といったネガティブな情動要因によって生じる困難さから、コミュニケーションを避ける傾向にあることが指摘されている(e.g., 坂本, 2013)。本論文では、今日の国際社会において求められる英語コミュニケーションを「異質な他者との英語コミュニケーション」と概念化した上で、この種の言語使用場面において生じる情動面の困難さに対する手立てについて、心理学の見地から論じることを目的としている。

心理学では、異質な他者との言語交流活動は「越境」と呼ばれる概念によって示される(Engeström, 2001)。本論文では、情動要因の内、異質な他者との交流に際して生じる情動的な困難さを論じるための観点として、この越境に注目する。先行研究では、越境を下支えする情動要因のうち、不安や緊張といったネガティブな情動要因の緩和に関する研究が主に進められてきた(Lindqvist, 2019; Tsui & Law, 2007)。本論文では、越境において主体性が重要な役割を果たすという指摘(田島, 2016)に基づき従来の研究の多くが注目してきたネガティブな情動要因の低減ではなく、主体性と関連性の高いポジティブな情動要因の喚起による越境の促進に関する影響に注目する。

ポジティブな情動要因の内、これまでの越境研究が注目してきたのが、困難を克服するための活力を示す「勇気」である(e.g., Enright & O'Sullivan, 2012; Yamazumi, 2007)。本論文ではこれまでの先行研究を参考に、今日の社会における異質な他者との交流に際して生じる困難さに対する促進要因として、この勇気概念に注目する。

しかし、これまで越境における勇気の効用について論じた先行研究はいずれも勇気の解釈に関して、個々の研究者の実践知に基づいたものとなっている。そのため、これら先行研究を相互参照することが困難であり、勇気の観点から統合的に捉えることも困難となっている。さらに、これまでの先行研究は、インタビュー研究もしくは理論研究のどちらかに留まっており、数量的な観点に基づく体系的な実証が行われていない。これは越境のような困難な場面における勇気を測定するための指標が存在していないことが理由として考えられる。

以上の点を踏まえれば、本論文が注目する異質な他者との英語コミュニケーションにおける情動要因に関して勇気論の観点から検討するためには、これまでの個別具体

的な知見を統合するための視点および統計を用いた数量的な検討が必要になると考えられる。

本論文はこれらの課題を達成するために、理論研究、実証研究、総合考察の三部七章から構成されている。以下ではこの越境における勇気に関する問題の議論の展開を中心とした本博士論文を構成するそれぞれの部の概要について述べる。

まず理論研究では、心理学の知見から勇気の効用に関する先駆的かつ体系的な検討を行った心理学者アドラーの知見を依拠として、これまでの先行研究を統合することを可能にするための概念的枠組みの開発を行った。次に実証研究を行い、開発した枠組みに基づく勇気を測定するための質問紙開発を行い、越境的学習における勇気を数量的に測定可能なものとした。その上で、勇気が英語による越境に与える影響について質問紙調査および統計を用いた解析による検討を行った。

さらに本研究の質問紙調査によって得られた知見に関して、教育現場に対してより実践的な形で還元をするために、より実践的な検討を行った。

具体的には、授業プログラムを伴う実験研究を実施し、質問紙研究によって得られた結果が、実際の授業場面においてどのような機能をするかについて検証を行った。

最後に総合考察では、本論文の知見が今日の英語教育における情動問題に対する貢献点および今日の国際社会で異質な他者と勇気をもってコミュニケーションをすることのできる人材育成を目指した教育実践に関する考察を行った。

続けて各章の成果を簡潔に論じる。まず理論研究の冒頭となる第一章では、本論文の導入部として、今日のグローバル化社会における異質な他者を相手とした英語を用いたコミュニケーション活動を「異質な他者との英語コミュニケーション」と定めた上で、日本の英語教育に関する研究のレビューや、ヨーロッパ言語共通参照枠

(Council of Europe, 2018)における言語や文化等の異なる文脈をつなぎ合わせることを目的としたコミュニケーション活動を示す「仲介」概念の分析を通じ、この種のコミュニケーション場面における情動要因に関する検討が不十分であることを論じた。

続く第二章では、越境理論を軸に異質な他者との英語コミュニケーションと同じく本論文が定めた母語による実践的な越境活動を示す概念である「母語使用を前提とした異質な他者とのコミュニケーション」における研究知見の観点から越境における情動要因に関する検討を行った。越境の先行研究では、不安の抑制だけでなく、活動の促進としての勇気に関する研究も行われてきた。本論文では、越境において主体性が重要な役割を果たすという知見に基づき、従来の情動要因に関わる研究に見られる不安の低減ではなく、勇気の促進に着目することに対して意義があることについて論じた。一方で、越境の先行研究では勇気の定義に関する体系的な枠組みがないため、これら先行研究を統合するための勇気の枠組みの提案を行う必要があることを論じた。

第三章では、心理学の観点から勇気に関する先駆的な研究を行ったアドラー理論を用いて、既存のアドラーの勇気論を整理し、アドラーの勇気概念を「自己に対する優越性の追求」と「共同体感覚」の2軸から捉える「ACTモデル」の提案を行った。そして、この枠組みの観点から個別具体的な既存の勇気研究の体系化を行った。

他にも第三章では、勇気が個人単独では育むことが困難であるという先行研究の指摘を踏まえ、アドラーによる勇気を育む対人支援理論である「勇気づけ」に注目した。本論文ではこの勇気づけに注目することの意義を示した上で、菊島（2003）のソーシャルサポートに関わる情動理論を参考に、理論的な概念である勇気づけと実践的な概念であるソーシャルサポートの接続を行った。

理論研究の最終章となる第四章では、これまでの理論研究に関する総括を行い、先行研究の課題を明らかにした上で、これを踏まえた実証研究の目的を示し、続く実証研究との接続を行った。

実証研究の入り口となる第五章では、本論文が提案した勇気モデルに基づく勇気尺度の開発および勇気づけを含む対人支援が越境に与える効果について統計による数量的な検討を行った。分析の結果、開発した勇気尺度は ACT モデルと同様に、自己に対する優越性の追求と共同体感覚による 2 因子によって構成され、信頼性と妥当性についても確認された。またこの質問紙を用いて数量的な検討を行ったところ、勇気づけの内、友人からの対人支援が勇気の構成概念である共同体感覚に正の影響を与える勇気づけとして機能した場合には、越境の各構成概念に対して間接的に正の影響を与えたことが明らかとなった。

続く第六章では、質問紙研究で得られた知見をより実践的な形で検討を行うための授業プログラムの検討を行い、質問紙研究で得られた知見が実際の教育実践においても同様に見られるかについて検討を行った。まず授業プログラムで用いる題材とプログラムの実施言語に関する検討を行い、地球平面説を信じる架空の甥っ子を地球球体説の立場から説得を試みるという疑似的な越境体験を可能にする地球平面説課題を題材として採用した。その上で、実施言語については同様の授業実践がこれまで行われていない点を踏まえ、基礎的なデータを得ることを目的に母語使用を前提とした異質な他者とのコミュニケーションの観点から授業プログラムを実施した。

授業プログラムの検証を行った結果、授業プログラムを通じて参加者の共同体感覚が増加し、より生産的な越境が展開される傾向が明らかとなった。また事例分析を通じて、参加者間の勇気づけがこれら要因を促進するという質問紙研究で得られた知見と同様の関係性が実験研究において見られた可能性が示唆された。この結果を踏まえ、考察では権威性という観点を軸に、異質な他者との英語コミュニケーションとの接続を行った。

総合考察となる第七章では、理論研究並びに実証研究の結果を踏まえ、英語教育に対する本論文の貢献点を検討すると共に、これらを踏まえた教育現場における授業案に関する検討を進めた。

本論文は、今日のグローバル化社会においてますます重要性を増しつつある異質な他者との英語コミュニケーションに際して見落とされがちな情動要因に対して、勇気の観点から仲間同士の対人支援（勇気づけ）が効果的である点を理論的かつ実証的に示した点において新規性がある。教師は、生徒たちがこのような関係性を育むために、教室の内外において友人同士がお互いに励まし合い、高め合うことのできる機会や空間の提供が求められると考えられるだろう。